

第四十六回中央教化研究会議
現宗研創立五十周年記念座談会

現宗研の五十年と教化学の現在

三原 正資 (現宗研所長)

石川 浩徳 (現宗研元所長・現宗研顧問)

木村 勝行 (現宗研元主任・現宗研顧問)

渡邊宝陽師 (現宗研元主任・日蓮宗勸学院長)

遠藤教温師 (現宗研元主任)

内山堯邦師 (現宗研元主任)

赤堀正明師 (現宗研元主任)

影山教俊師 (現宗研元主任・現宗研元顧問)

司会 高佐宣長 (現宗研主任)

肩書きは開催当時のものです

高佐 来年の四月をもちまして、現代宗教研究所は創立五十周年ということになります。

現在、現宗研の中で、五十周年企画会議というものを持っておりまして、何かできないか、何をしようかというようなことで議論をしているところですが、その第一弾として、と申しますか、この中央教研の場で、歴代の所長・主任をお務めいただきました方々にお集まりいただいて、本宗における教化学の過去・現在・未来について大いに語り合っていたらこうという趣向で、この座談会を企画した次第でございます。

御健在の所長・主任者の方、全員にお集まりいただく予定だったのですが、実は田澤元泰前所長が、本日、都合により、お早くお帰りになったということで、この場にお座りいただけないのが大変残念でございます。

このような次第で、現代宗教研究所創立五十周年記念座談会を、「現宗研の五十年と教化学の現在」というタイトルで持たせていただきたいと思います。

皆さんもお顔を見ていただければ、よくご存じの方ばかりだろうとは存じますが、今、渡邊宝陽先生から三原所長まで、ご就任された順番でお座りいただいております。それぞれの方に、ご就任をされた頃の社会的な情勢でありますとか、現宗研でその頃やっていた諸研究調査活動でありますとか、あるいは、座談会ということですから、あまり硬くなり過ぎずに、思い出話なども含めながら、御発題というのと少々オーバーでございますけれども、まずお話をいただければと存じます。では、渡邊先生からお願いたします。

渡邊 今回は第四十六回中央教研ですね。実は私が教化研究会議というものを提案したんです。ちょうど、その後に生まれた方もいらっしやるかと思いますが、戦争中に皆、お百度参りとかいろんなことを一生懸命やって、少年時代の僕も「神風が吹く」と最後まで信じていました。そのようにしてきた戦後で、「神も仏もあるものか」という時代でした。

そういうことで、各仏教教団が、どうにもならないということで、教団再生運動、教団護持運動みたいなものを試みたんですね。特に関西で。僕のささやかな記憶によると、浄土宗がいま「おてつき運動」というものを始めて、それから東西両本願寺などが一生懸命その運動をやった。それで、運動をやるということは、やはり教団の現代的課題というものを取り上げていかなければいけないということだったようです。

私は、ほとんど忘れかけているのですけれども、配られた資料によると、昭和四十三年に第一回が開かれたのですね。茂田井教亨先生が所長なので、私が研究主任ということで急に引っ張り出されて、お手伝いしました。

私は考えました。要するに、組織というのは組織だけで考えがちなのですね。それで、何か考えると、委員会を設立する。そうすると、どうしても自由な考え方というものは反映されない。そこで、どうしても「教化研究会議」でなくてはだめだ。委員会などでは、一定の結論を絶えず出さなくてはいけない。そうじゃない。もっと皆さんが持つ

てるものを吐き出してもらいたいということを痛切に思ったのです。平元義雄さんとか木名瀬寛明さんとかね、まあ、錚々たる方々でした。私の親父みたいな、叔父さんみたいな人ですね。そういう人が地方から遠路はるばる一生懸命出てきていただきました。

最初は、レジュメにも書きましたが、とにかく予算がないから、「来年にしろ」と当時の教学課長から言われました。私は「冗談じゃない」と返しました。「予算を当てにするような人が集まって何をやるんだ」と言って…。

僕は三十五か六です。それで、「なにしろ手弁当で集まれ」と主張しました。「汽車賃も全部自分で持ってくる、そういう熱心な人が集まって、必ず熱心な願いがあるはずだ」っていうことを言いました。何人集まるかと思いましたが、けれども、実際には色々工夫をしていたでいて、ちゃんと汽車賃も日当も出して集まってくれたケースがあったようで、七十人集まりました。僕にとっては感激でした。僕はもう、宗門というものに、ある意味では絶望していたのですけれども、それを見て「やあ、宗門はたいしたもんだ」と考え方を変えたのは、第一回教研会議の思い出でございます。

高佐 はい、ありがとうございました。

「現宗研関係略年表」というのをお手元にお届けしてあると思います。それぞれの方の御就任時期等の、大体の位置が書いてあります。あまり厳密なものではございませんので、今日の座談会の参考資料程度ということで御覧いただければと思います。

今、お話があつたように、渡邊先生は、昭和四十二年、茂田井教亨先生が所長になられたときに、当時既に立正大学の助教授でいらしたのですが、現宗研の研究主任に招請をされてということであつたようでございます。

そのときに一緒に庶務主任になられたのが、木村上人でございます。現在、現宗研の顧問を務めていただいております。では、木村上人、お願いをいたします。

木村 はい、木村でございます。

私は現宗研には、布教研修所設立決定の前ぐらいから関係しておりました。教務部の方に属しておりまして、教務部の主事をしておりました。それで、宗務院には出入りしておったわけですが、なにせ貧乏な時代でございまして、宗務院の給料は七千円いただいたという時代で、食べるだけで精一杯、宗務院に通うお金はないというような時代でございます。

当時日蓮宗の青年会は七ヶ所しかなかったのですが、そこで日蓮宗青年会なるものを全国に結成すべきだというようなことで、全国に呼びかけ、一生懸命努力を致しました。さらには、今までのような宗派にとらわれた青年会ではだめだと、ですから、日青連でなければならぬ。こういうことで、第五回までは日青連でやってきました。結果、各派の門下の青年が集まったわけでございます。

第一回のときには、もう立派に出まして、そして各教派とも一緒にやっついこうことだったのですが、日蓮宗の方は日蓮宗の話にどうしてもなる。そこで、他の陣門派の人達から「日蓮宗さんだけやりなさい」と、こういうアドバイスをいただいたものですから、第五回から日蓮宗青年会と名乗ったわけです。

当時、全日本仏教青年会に加入もした、既に立正大学で現仏研あり、探遺会あり、様々な会がありました。そういうものに所属をしております、大学仏教青年会議を立正大学が組織した。私はそのときのメンバーでもあります。そういうことで、東大仏青をはじめとして、東京都内二十一大学の協力を得ました。

そんな前史がありますが、いずれにしても、教務部に属しながらそんなことをやっております、現代宗教研究所設立が決まったということで、「ああ、よかつたな」と。で、所長は「久保田先生だ」とのこと。そしたら久保田先生から、直接呼出しがありまして、「私が言うからおまえが書け」とおっしゃられたので、いろいろ久保田先生の代筆をさせていただいて参りました。その当時の主任さんが近江幸正さん、それから渡邊先生だったと思います。私は

庶務主任の小山海信さんの下で私は仕事をしていたわけでございます。

その後、昭和四十二年には、茂田井教亨先生が所長に就任されまして、現代宗教研究所の顔が出来たと思います。久保田正文先生の時までは、「肩書きはあれども顔がない」ということで、宗会でも「現宗研の現況報告は、皆さんに渡したから、各々読んでくれ」というような扱いを受けたものでございます。「これではだめだ。確実に現宗研は無くなる」ということで、茂田井先生が就任なさったときに、渡邊先生、茂田井先生、私と、この三人で、「何としても、これをやめさせないようにがんばりましょう」ということになった。

そういうことで、第一回教化研究会議。この第一回教化研究会議には、私は宗教教育とそれから学校教育ということで、宗教を教育の場面から考えたかどうかということについて提案しました。その後はずっと、この課題は今日でも背負って、信行会というのはそうあるべきだと考えております。

ですから、わたしの信行会活動は檀信徒教育活動です。その教育活動の中に、檀信徒の中にどういう教学が必要なのか。私は信徒にとって教学はどのように必要なのであるか、そういうことを一生懸命追求してきたつもりですし、その仕事を現在でも続けている。

あとは話が長くなりますので、ここで止めさせていただきます。

高佐 ありがとうございます。

茂田井先生の後に、宮崎英修先生、宮崎先生は二度なられています。その一回目の所長になられ、室住一妙先生を経て、中濃教篤先生が昭和四十六年に所長になられます。その頃に、皆様のお手元の資料で「石川康明」というお名前がございましたけれども、後の石川教張先生が、これも研究主任と書いてあるのですが、最初は庶務主任をされたようでございます。その石川教張先生とご一緒に主任をされていたのが、内山堯邦上人と遠藤教温上人ということ

ございます。

では、内山上人、お願いいたします。

内山 内山でございます。随分まだ若いつもりでいたのですが、まさかここで、渡邊先生から三番目に座らされるとは思っておりませんでした。

そう思いながらこの略年表を拝見しますと、一枚目の所長欄のお名前の方は、皆さん、もういらっしやいませんね。二枚目に移りましても、石川教張さんはご遷化で、久住謙是さんもご遷化で、所長経験者で現役の方は石川浩徳さんと田澤元泰さんですね。

その他にも現宗研の関係者で亡くなった方も結構おられます。何か寂しい思いをしながら、この略年表を拝見している次第でございます。

私が現宗研におりましたのは、昭和四十六年からとなっておりますけれども、中濃教篤先生の所長時代からであつたわけですけども。年表というのは面白いですね。これを見てみますと、一般社会の動きを思い出しながら、その頃の状態が思い浮かんでくる。例えば、四十六年の一般のところ、全日空墜石事故というのがありましてね、たしか自衛隊の飛行機と衝突して、飛行機が岩手県の上空で落ちたということだったと思いますが、たまたまそのとき下を自動車で走っておりまして。それは、青森県での宗教意識調査をその当時やっております、そこに調査に行こうということ而走っているときに、ラジオで、真上でそういうことが起きているということを聞きながら走ったときのことを、今、鮮明に思い出しました。全日空事故なんていうことを、墜石事故という言葉を見た瞬間に、もう全然覚えてなかったことですけども。その当時、青森の宗教意識調査というようになことを現宗研でやっていたということも思い出しました。

現宗研は、五十年からの色々な流れがありますから、色々な時代を経てきていると思いますけれども、初期は、やはり立正大学の先生方に色々なことをお願いしながら、レベルアップしていくという時期があったように思います。私どもも現宗研に籍を置きましたけども、大学の方にも半分足を掛けていましたし、例えば青森県の宗教意識調査をやるというようなことにつきましても、大学の社会学の教員と提携して、社会学の学生さんに協力して貰って調査をするというようなことをしておりました。

「所報」を『現代宗教研究』に改称したということも、思い出の中にございます。こういう研究誌の題名というのは、やはり「研究」ということを正面に謳おうというようなことがありました。

『日蓮聖人の伝記と思想』、『月報』を『研究時報』に改称、それから『日蓮聖人名言集』の発行といったような刊行物などを見ておりますと、当時それぞれ、ある部分で若い時代でもありましたし、若さに任せて色々やっていたということを思い出します。

私のいた時は、その辺りまでで、石川教張さんと遠藤教温さんと主任をしながら、現宗研を盛り上げていた。特に教研会議ということについて思いますれば、いわゆる講習会というのは沢山ありますけれども、現場の教師が日々抱えている問題を持ち寄って語り合おう、その中から、色々な研究交流の中から教化の方策を見出していこうという会議は、やはりこの教研会議だけでありまして、五十回も続いてきたということに深甚の敬意を表する次第でございます。

その後、私は宗務院の経理課長をやったり、その後、新聞社の設立に関わって、新聞社の専務をやったりといったようなことになりました。現宗研との活動は疎遠になりましたけれども、その中でも思い出しますのは、日蓮宗新聞社設立が昭和五十五年にございます。実は五十六年が七百遠忌でございます、課長なんていうのは、その七百遠忌の準備で忙殺されていましてね、とても新聞社の設立の仕事なんてやってられないということで、当時、松村寿顕

総長でしたけれども、「七百遠忌の五十六年が終わったから、必ずこの仕事を推進するから、一、二年待ってもらえないだろうか」という説得を随分しました。

「うん、うん」と言っていて聞いた総長が、忘れませんね、「分かったよ、内山君、これやろうよ」と言うんですね。「えーっ」って。もう、トップが「やる」と言われたらもうだめですよ。その瞬間から七百遠忌の準備をしながら、一方で日蓮宗新聞社を設立した。つまり、登記をしたり、池上駅の前にビルの一室を借りて、新聞社を作ったというようなことがありました。

何で申し上げるかというと、当時は伝道部の中の新聞部でしたから、予算で新聞を作って新聞を買ってはもらうけども、収支のつりあいには関係ないわけです。新聞社になりますと、自分で売ったお金でしか自分たちの活動ができない。その新聞社が、今や自前のビルを持って、そして何十人かの社員を抱えて、新聞を出し、雑誌を出し、いろいろな教化活動の材料を出しておられる。何といいますか、拡大再生産を続けているというのは、まさにこの日蓮宗新聞社を作ろうとしたこと、しかも、課長連中が「絶対無理だから。忙しくてやっていられないから」という言葉を聞き続けた最後の一言が、「分かったよ、言っていることは。だけど、やろうよ」ということが起点でありました。

そんなことを、この年表を見ながら、やはりそういうトップの決断というのは非常に大事なものである。ある部分、いろいろな動きを変えるものを持っているんだということを感じている次第でございます。ありがとうございます。

高佐 内山上人、ありがとうございます。

引き続き、遠藤上人。どうぞ遠慮なくご発言を。

遠藤 遠藤です。

年表を見ていただきながら話が進められているかと思います。やはりごらんいただきたいと思うんですけど、私が庶務主任になったのは昭和四十六年ということで。実はその前に、中濃教篤所長と石川康明研究主任とは法縁も同じで、色々な縁が深くて、現宗研以外でも、他の宗教平和運動とか、様々な運動で常時一緒にいたものですから、「遠藤さん、少し現宗研を手伝ってくれないか」と言われたのがきっかけだったような気がします。

そして、石川教張上人の下で事務的内容の仕事させてもらっていましたが、たまたまその前に、渡邊先生からお話があったような、第一回の教化研究会議が開催されて、その報告書が大変立派なのが出来たんですね。丸山照雄主任の仕事として完成されたと思いますけれども。ところが、それだけでなくて、現宗研としては非常に出版物に力注がれた丸山上人です。ただし、大変な金額が掛かってしまったので、予算的な点で批判を受けてしまわれまして、直接にはそういうことも一つの大きな原因だったかと思いますが、丸山主任さんが辞められることになってしまいました。

その後を受けたような形ですけれども、庶務的な仕事をして一番感じたのは、宗務院の二階に現宗研の部屋がありまして、机が一つ、二人が座ればいっぱいみたいな狭い部屋だったのですが、お金の支出が必要になって、宗務院の財務部に行きまして、課長にですね、「現宗研ですけど、この費用を出してください」と言うと、それを全部チェックしてですね、いいとか悪いとかって非常に厳しかったんですね。コピーも例えば「これをコピーしてもらいたい」と言うと、「何枚コピーするんだ」とか、内容を見られる。今から思うと、もう戦々恐々の思いで宗務院の財務部課長に、そういう請求を持って行った思いがありますけれども、それというのも、やはりその前の色々なことがあった影響を受けてしまったって、当時はそういう思いで現宗研の庶務をしていました。

年表中、昭和四十九年に「靖国法案反対声明」というのが書かれています。これは当時、靖国神社を国営化すると

いう自民党政府の政策が出て、宗教界を挙げて、この靖国神社国営化の法案に対して反対する運動が起きました。これは、全日本仏教会からキリスト教から新宗教などが一緒になって、多分これは日本全国でも初めてだと思えますけれども、「靖国問題連絡会議」というのが出来まして、そこで宗教界挙げての反対の運動が進められました。

そういうこともあって、現宗研として靖国法案に反対する声明が出されました。このことは『日蓮宗新聞』の昭和四十九年の六月十日号に掲載をされていまして、一面全面を使つて靖国問題の特集を組んでいます。一つは問答形式で、靖国神社の問題について解説をしてありました。もう半面は、今申し上げた、現宗研の靖国法案反対声明が掲載されています。かなり長文の反対声明が出されておりまして、これを紙面に載せて掲載し、問答形式で靖国問題の解説をしようっていうのは、現宗研で石川主任などと相談をさせていただいて、「遠藤、これを書きなさい」と言われて書かせていただいたものですけれども、私自身としては、唯一『日蓮宗新聞』の中に名前の残った文書として、靖国神社問題の問答集が記憶に残っているとどこでございませう。

高佐 ありがとうございます。

今のお話の中にも出ました、先頃遷化された丸山照雄さんも、渡邊先生の頃に一緒に主任をされておられました。もう少し長生きをしていただければ、ここに座っていただけたのに残念だなと思います。

少し時間、時期が下がります。お手元の年表を見ていただくと、次はもう赤堀上人になってしまいましたが、例えばその間に、今日ご欠席の田澤元泰上人や、故渡邊清明宗務総長なども主任を経験されておられました。

年表に複数の主任が併記されていますが、これは、実は常に三人の、例えば研究主任・調査主任・庶務主任が必ずいたということではないようなのですけれども、概ねこの時期にご就任いただいていたということで、名前を書かせ

ていただいております。それが二人になり、主任一人制になった最初の主任が赤堀上人ということのようでございます。当時は長谷川正徳上人が所長にご就任の頃だったようでございます。

ということで、赤堀上人、お願いをいたします。

赤堀 私が在任したのは昭和六十年から平成六年まで、九年間です。非常に激動の時代で、社会と宗教の接点が多くなり、宗教が社会から問われているという、そういう時代に当たりました。

社会と接点があった事件が三つあり、一つは墓地問題、二つめが過疎問題、三つめがオウム真理教事件です。

宗務では、教育制度の改革ということが叫ばれていて、立教開宗七五〇の企画案を、実働化していくという時代に当たっております。

墓地問題は非常に面白い事件で、バブルと同時に土地が高騰して、連動して墓地が高騰したんです。ご存じの牛久にある日本一の大仏を大野屋が造りまして、話題になったときだったんですが、実はこの事件は仕組まれた事件だと言われているとして、NHKの女性ディレクターの方が「赤堀さん、土地が足りないから墓地が足りないという番組を作りたい」と言ってきたんですが、調べていくと、どうも、逆に墓地が余っているんですね。それで、最終的に「墓地が余っているという番組にしよう」と企画書を変えたんです。

ところが、その途中から、石屋さんとか番組制作の上層部の人たちが動き始めて、番組の方向が転換して、結局、墓地が残っているのか、余っているのかという、お寺の墓地の現況調査に変化してしまいました。

この墓地問題は、井上治代さんですか、葬儀評論家の碑文谷さんなどが発言されて、葬祭ディレクターという、葬儀者の資格を作るところまで発展していった、大きな面白い事件でした。

過疎問題は、前任の久住主任が地理学的な立場から調査されていたんですが、これは宗門の未来がかかると同時に

国全体の問題であるという視点で、「あなたは知っていますか」という一冊の本にまとめたんです。

この冊子が出てすぐに、共同通信の方が飛んできて、「赤堀さん、面白いもの出したね。これは、日本中の過疎の人に読んでもらいたい。役所の人にも見てもらいたい」ということで、新聞各紙にかなり掲載をしていただきました。増刷をして、ふだんは日蓮宗のものに見向きもしない浄土真宗などからも、「何百冊送ってほしい」という注文があったんです。

一番大きいのは、やっぱりオウム真理教事件でした。この問題は横浜の方の楠山上人から、坂本弁護士が横浜で殺された当初から情報が入って、現宗研の私にも情報を提供してくれましたので、すぐさまこの問題に対応出来ました。それで、この問題に関して「脱カルト研究会」という、カルト問題の研究会が発足するんです。この問題が発足したときに、皆さんご存じの江川紹子さんですとか、滝本弁護士さんだとか集まって、新宿の常圓寺をお借りして、設立のための準備会を開いたんです。そこに楠山上人と私が入っていききましたら、江川さんたちみんな、拍手で迎えてくれるんですよ。で、「どうしたんですか」って聞きましたら、「宗教者が初めて来てくれた。これまで、評論家だとか学者は来てくれたけども、仏教教団の方が来られたのは初めてだ」という話なんです。

これが発足して、カルト問題の研究対策は、ここが窓口になっています、これに関して日蓮宗が既成教団の中で一番初めに取り組めたのは、誇るべきことではなかったかと思っています。

このことから、「ニュース23」（ニュース・ツースリー）やNHKの番組にコメンテーターと呼ばれ、筑紫哲也さんなど評論家の方から、なぜ仏教はもつと世の中に出てきて発言しないのかを求められました。

この後も、『読売新聞』で、今日蓮宗新聞にも書いている平山君が、「お坊さんがんばる」っていうのを連載して私も取り挙げてくれました。このように、オウム真理教をきっかけに、国際宗教研究所ですとか、さまざまな研究機関との連携が取れるようになり、情報収獲が非常に容易になりました。これは研究所にとっては大きな財産になってい

くものだと思うんです。最新のデータが集まり、自分の方からも情報を発信していく場所が与えられるということで、このオウム真理教事件は非常に大きな出来事でした。

あと、教団内の問題もありますけれども、以上にさせていただきます。

高佐 ありがとうございます。

今、ご紹介をいただいた、『過疎地寺院調査報告 ここまで来ている過疎地寺院 あなたは知っていますか?』という書物については、先だって文化庁で、過疎問題について話せというお話がございまして、伺わせていただいたことの、『宗報』の「現宗研だより」に書かせていただきましたが、そこにも記しましたように、いまだに現宗研の代表作になっているところがあるようでございます。

また、ここで話が少々前後致しますが、現宗研は、『現代宗教研究』という所報を出しておりますけれども、この名称になりましたのが昭和四十七年でございます。日蓮宗という包括法人が持っている登録商標がたしか二つございまして、その一つが『現代宗教研究』という名称でございます。というようなお話も、この機会にご紹介をさせていただきますかと思えます。

さて、ちょうど、石川所長になられたときに赤堀主任が降りられるというようなことになるわけですが、では、石川上人、お願いをいたします。

石川 石川教張さんがお体の具合が悪くなられて、そしてお辞めになるというようなことになりました。平成七年に、私に所長という話になりました。実を申しますと、ご承知のとおり、それまでの現代宗教研究所というのは、初代所長が久保田正文先生、そして第二代が茂田井教亨先生、そして宮崎英修先生、そして、身延山大学の教授をしてお

られました室住一妙先生、そういう、そうそうたる学者先生が所長をされておられたことでもありまして、石川教張先生から「石川さん、所長を受けてくれないか」というような話がありましたときに、「私は、とてもお受けできない」というお話をいたしました。

やはり現代宗教研究所というのは、当時、いわば日蓮宗宗務総長の直属として存在しておりまして、時には総長の諮問に対して答えるというような重要な役割をした部署でもありました。それに対応してきちんとできるというようなことになりまして、私は学者でも何でもありませんし、教学の方も十分にしているわけではありませんので、無理じゃないかという話をしたのですが、当時、顧問でもあり、また所長経験者でもある中濃教篤先生や、あるいは長谷川正徳先生から電話をもらいまして、実はもう石川教張さんは、お体の具合が、このまま続けていったらおそらく倒れてしまうだろうというようなことでした。

私は長い間、宗務院で伝道関係の仕事をさせてもらっておりまして、ちょうど七百遠忌が目前に迫ったころ、松村内局が誕生したときに、伝道の課長をということで宗門に関わってきたのですが、そうした経験をひとつ生かしてもらえばいいのだと説得されました。「現代宗教研究所は、今までの研究所と違って、もちろん現代社会に即応する研究所ということで、研究あるいは調査、そしてその布教伝道の基本となる資料を作制し提供するというような役割もあるけれども、勸学院ができてから、相当役割も変わってきておるから、石川さん、ひとつ頼むよ」というようなことになったわけです。

それはどういふことかと申しますと、昭和六十年に、勸学院が誕生しているのです。日蓮宗の勸学院というのは、それこそ教学の振興、特に総長の諮問に答える機関ということになってきております。そうなりますと、「もう、いわば現代宗教研究所の役割というのは、むしろ全国の教師の皆さん方とともに、社会の動向にいち早く対応できるような教化のための研究会議等に集中していくということが大切なので、そういうことを考えれば、所長というのは、

石川さん、あなたのような布教畑でもつてずっと関わってきた人がいいんだよ」というような説得に負けてしまっていますね。それで、私は石川教張さんの後を受けて、第十代所長を引き受けた訳です。

この略年表のとおり、平成七年の五月、奥邨正寛宗務総長のときです。

その頃、先ほど赤堀さんが言っておりましたけれども、やっぱりオウム真理教の地下鉄サリン事件で大変な時だった。それが平成七年です。

そのオウム真理教に限らず、幸福の科学だとか、あるいは法の華三法行だとかですね、福永法源のね、あれだとか、あるいはライフスペースだとか、いろいろと、いわゆる新々宗教と言われていた、いわばカルト教団と世間から言われておりましたが、非常に世間に対してとんでもないことを行っているというようなことで、「今、現代宗教研究所が抱えている問題というのは、実はこのカルトの問題、いわゆる新々宗教に対応するだけのそういう研究というものを進めてもらいたいんだ」と。

それが先ほどの『過疎地寺院調査報告　ここまで来ている過疎地寺院　あなたは知っていますか?』というね、過疎地域寺院の研究調査といったようなことがありましたし、さらには、それはもう前所長のころから言われておりました、教化学の確立ということが一番大きな問題でして、いろいろと研究もされておられたのですが、それをしっかりと前向きに進めていかなければならないと。

それは今でも同じことが言われていまして、教化学の確立、これは教学とは別に、教化学、やはり現宗研の役割とというのはそこにあるということで、それについて赤堀主任だとか、そのあと人事異動がありまして、亡くなりましたけれども、早坂主任、影山主任、そして伊藤立教主任と、色々と関わってきた。いずれにいたしましても、そういう、抱えている問題について、「ひとつやってもらいたい」ということで、所長を引き受けたということでもございました。

そのあと、教化学に関しましては、第一回教化学研究発表大会というのが、平成十二年に行われて、今日も続いて

おります。そういうことはまた、影山さんがおられますから、私の話はこれぐらいにしておきたいと思います。

高佐 ありがとうございます。

それで、その石川浩徳所長の下で主任を務められました、影山教俊上人でございます。

影山 影山です。

私も、石川教張先生に「研究員になれ」と引つ張られて入ってまいりました。石川教張先生も中濃教篤先生も同じ法類だったんですから、いろいろつながりがあって引つ張っていただきまして。ちょうど赤堀主任さんのときに最初は研究員で入っております。

いまインターネットを検索しますと、過去ログがいっぱい上がっているのですが、過去ログを過去ログにしないためには、如何に、現代とつながるかということだと思ふのです。ですから、過去ログを現代につなげながら、少し現宗研のお話をさせていただきたいと思います。

ちょうど私が主任になったときには、「護法運動」を發展させた形で「お題目総弘通運動」が昭和六十年以降、十八年計画が提唱され、その最後の年度にかかっていました。立教開宗七百五十年のちょうど御正當を迎えるところでした。この頃は宗門的にも大変でしたけども、先ほど赤堀さんが仰ったように、オウムの問題が非常に大きな問題で、宗教が問われた時代だったのです。逆風が強くて、「宗教」というと、それだけで毛嫌いされる時代だったのです。

中央教研を、三年間清澄の研修会館で催したことがあります。それは、例えば東京のホテルで中央教研を開くと、懇親会などで、坊さんが肉を食べたり酒を飲んだりしているのを新宗教の方々に見られると、「何をやっているんだ」ということになりかねないということで、清澄に持つて行ったという経緯もあるのです。ですから、非常に宗教が、

周りの新宗教も含めて、大変な時代でした。九・一一もちょうどこの時代だったのです。

この宗教が問題になった時代に、オウムにしても、教学的に、また学問的に否定しても、アレフとか、ひかりの輪とかいう形で、今でも宗教行為が続いているというところに、教化学という切り口、その考え方がとても大事になってきたわけです。

ちょうど現宗研が、五十年を迎える五十年前にどんな社会状況があったかといえば、創価学会が、昭和二十五年から折伏大行進を始め、昭和三十九年に公明党結成という、宗教運動ではなくて社会政治運動を行っていた。このときに、教学的に、また学問的に、創価学会を否定しても、その隆盛が現実には変わらなかったという危機感が、現宗研を作ってきた背景があります。ですから、この危機感から、「教学の現代化」ということが強く叫ばれて、現宗研の規程にもそういう文言が、「教化学とは教学の現代化」というふうに強く叫ばれた。これは、中濃教篤先生からもういうお話をしていただきました。

これまで現宗研では教化学とそのまま、教学の現代化というところが、「教学の現代的解明に関する研究」と改められていますけども、やはりオウムにしても、創価学会にしても、今、色々な学問が宗教を否定しても存在して機能しているところに、学問の限界があると思います。それをどう補完していくかというところに、教化学という教学の現代化の切り口があるわけです。ちょうど私が主任のときに、石川教張先生、また内局に色々とお話を伝えるためには、特に新宗教の創価学会をはじめ、顕正会の動向・調査をして、それを内局に上げられるように図ってきたわけです。

それから、現場からの声として、教化学研究発表大会をこの時代に始めました。それは、皆さんの現場の方々の声が一番大事ということで始まったわけです。

それと、学問と信仰との接点を求めて、信仰を持っている学者先生、お医者さんで信仰者がいたり、そういう方々

をお呼びして公開講座を行っておりました。

それから、今、現宗研のホームページがありますが、あのデータベース化も、この時代にデジタル・プロジェクトを作って進めてきました。

それからその関連で、清澄の立教開宗七百五十年の法要を、その時代に、今からもう十何年も前にネット配信を行いました。これはデジタル・プロジェクトの方々に大変な苦勞をしてやっていただきました。全て自前で行いましたから非常に安価にできました。そういった意味では、現代という、今という時代をやはり見越して動いていたのです。この現代を教化学という側面で見えれば、少子高齢化になった瞬間に、今、創価学会が布教できない状況になっている。伝統教団においては、それまでも大変だったのに、創価学会が布教できない社会になって、もう一度この教化学という切り口を、社会が何を求めているところから見直さなきゃいけない時代が、今、来ていると私は思います。

その中で、はっきり申し上げれば、今、創価学会が布教できない状況でいながら、伸びている組織があります。宗教とは言いませんけれども、瞑想やヨガなど健康に関連するものです。皆さんの一人称に関することです。教学的なものというのは、二人称、三人称でどう伝えるかというところにありますが、どう私が自分自身を感じているか、一人称の切り口が求められている気がします。教化学、現宗研はずっとこの方向で見えてきましたので、ぜひ、皆さんが現場のいろんな意見を、教化学というスタンスで語ってもらえたらなんと、現宗研ができてちょうど五十年になるので、過去ログにしないように現代につなげて、ちょっと話してみました。

以上でやめさせていただきます。

高佐 影山上人、ありがとうございました。

つづきまして、現任の三原所長には、思い出を語ってくださいというわけにも参りませんので、今お話をいただいた諸先生方のお話へのご感想・コメントというようなことを、いただければと思います。

三原 はい。渡邊先生のお話を伺いながら、現在、先生には、勸学院でもお世話になっておりまして、その情熱に大変驚いているわけですが。ちょうど私が立正大学で学んでいた頃の先生は、非常におとなしい方だったような記憶があります。ですから、ただいまお話を伺いまして、現宗研の教研会議の設立に関わり、そして手弁当で七十人集まったという、情熱を当時持っておられたということに、実は大変驚いている次第でございます。

それから、遠藤元主任の話でございますが、靖国法案のデモの話が出てまいりまして、私もその頃学生でございまして、その靖国法案反対のデモに、もう何回も参加いたしました。ちょうどその頃、中濃教篤先生とも、しばしばそのデモの当所でお会いする機会があり、中濃先生も「面白いやつが来ているなあ」というようなことで、私の方を見ておられたということを記憶しております。

その頃のデモの溜まり場というのは、渋谷の日本基督教団山手教会でございまして、そこで唯一の楽しみというのは、そこに集まった仏教・キリスト教問わず、各教団の方々がたくさんいらっしゃいまして、その方々と色々なお話をするとというのが、私には大変な楽しみでございました。

それからまた赤堀上人は、もう大学時代以来の同級生でございますので、約三十年前のことになりますけれども、現在、立正大学の理事長をしております古河上人や、その辺りの仲間で、とにかく楽しそうに、力いっぱい現宗研の活動をしていたという思い出がございます。

「印象は？」という、ヒルトンホテルしか皆言わないんですね。とにかくヒルトンホテルで三回、教研会議をやった。そして終わったらみんなで歌舞伎町へ繰り出したという、あの思い出が一番強く残っております、日本が

バブルの時代だったと。その陰では、原子力発電所がどんどん造られていたということを、今では反省的に思い出す訳でございます。

さて、私は、ちょうど所長のときに三・一一に遭遇したわけですが、これは大変なことになるということで、それから宮沢賢治を通し、また、昨年・去年とこの教研会議を開いたわけですが、大変な意欲を持ちまして。つまり戦後間もなくの頃と、それから約七十年を経過した今日とでは、社会的状況・価値観・歴史観すべてがもう変化しています。その中でこの原発問題に対する宣言文を作りたいということで、所内の人たち、立場は右から左までおりまして、その右から左までの立場の人が、「まあ、これなら納得できる」というものを作ったわけですが、今日、宗会的に言うところと廃案になったわけですが、私は定期宗会を四回経験しまして、所管の部が提出した議案が廃案になったときの、この虚しさというのは、傍らでよく見ておりましたけれども、まさか自分でこういう経験をするとは思っていませんで、ちょっと今、心の中は「虚しいなあ」という気持ちであります。感想というと、こういうところがございます。

高佐 所長にそういう思いをさせてしまった主任といたしまして、大変いたたまれない思いをしております。

ここからは、これからの日蓮宗の布教伝道教化はどうあるべきか、あるいはこれからの教研会議はどうあるべきかというような視点で、それぞれの先生方に、御発題、御提言をいただければと思います。渡邊先生からよろしくお願い致します。

渡邊 だんだん世の中が組織化してくる。それは当然ですが、私は、教化学にこだわることについては、若干疑問を持っております。私が若い頃、布教の立て直しをしなければならぬという声が起こりました。私は直接的な答えを

出す形式には疑問がありましたので、教化研究会議という、会議体を主張しました。一番の出だしですね。あまり目的的に進めようとする、大切なものが抜けてしまふんですね。だから、戦後、日蓮宗教学研究発表大会が足りました。私が入学する前、昭和二十三年のことです。今回も重要な大会です。当日、多くの各聖が多面的に希望を持って、弱体化した宗門をどうしたら再建できるか、真剣に考えたことを、その記録から知ります。

そうしたことを知ると柔軟な姿勢で、皆さん、がんばって下さいとお願いしたい。様々な方が、今日は非常に各地から熱心におやりになっていただいた。それはもう大変ありがたく思っています。

高佐 では、木村上人、お願い致します。

木村 はい、今のお話を継承しますと、初期には伝道学として現宗研が提案しました。そして、伝道学として、伝道部がありますから、伝道部がありながら伝道学がないっていうのはおかしいということになりまして、その辺りの伝道を、町中に散らしていくチラシ等ですね、そういうものの作成、あるいは様々なサークル活動や、それから寺院婦人のテキストも、そんなことで作ったと思います。

ただ、そういうものは、あるときは予算化されてどんどん出るんですけども、あるときは出ない。今、機械化されていくことは良いのですけれども、今までやってきたことをやはり大切に、新入会員、あるいは信徒のいろんな集まり、あるいは御会式を行っているグループ、太鼓を叩いてやっているわけですね、汗をかきながら、この人たちの保存、そういう地味な活動をもっと宗務院としては目を向けてほしい、和讃なんかにももっと力入れてほしいと私は思います。

それで、日蓮宗の教団は半分が男性で、あとの半分は女性だということが、もっと世間に分かるように進んでほし

いと思っています。そういうことで、世間に対するアピールの仕方、もっと、単なる機器を使ってアピールするだけではなくて、内容の方でもっとアピールしてほしい。

中国へ行って、中国仏教の悪口を言ってきたのですが、それは「中国の人たちは、国分寺は造ったけれども、国分尼寺を造らなかったではないですか」と。私は「今造る。そのときは今ですよ、現代ですよ」という話をしてまいりました。そして、「日本の仏教の優れた国分寺・国分尼寺という体制を、中国も作ってください」と、こういうことを言ってきましたし、お互いにそういう点では交流し合う必要があるし、日本でももう少し、日蓮宗でも尼僧さんの教育、あるいは寺庭婦人さんたちの教育、そういうことを、もっと力を入れて、予算化して、やってほしいなと、そう思っています。

高佐 はい、ありがとうございます。内山上人、お願い致します。

内山 このレジュメを拝見してましてね、所長さんが自らがフィールドワークで各地の現場に足を運んで、各地の声を集めて報告されているというお姿にですね、深甚の敬意を表させていただいている次第でございます。

それはそれとして、今、別のことを言おうと思っていたのですが、木村さんが中国の話を出しちゃいましたから、ついでに私もします。

つい、この三十日に中国から帰ってきたばかりですけれども、私の肩書きの一つは鳩摩羅什顕彰会の事務局長という任意の団体です。法華経翻訳の鳩摩羅什の墓が、三十年前に行ったときに廃寺同然だったもんですから、これを何とか復興しようということで、随分皆さんから寄付集めをさせていただいて運びました。

今、何とかそれが出来上がってきてまして、横五十M高さ三十Mの、四層五階建ての大胸像が出来上がりました。

お寺に注文をつけて、御本尊を飾りますから、御本尊は一尊四士にしてくれということ、五Mのお釈迦様と四Mの四菩薩が建ちました。金色のお釈迦様と金色の四菩薩が建っています。ぜひ今度皆さんにお越しいただきたいと思えます。

それはそれとして、中国で、今ものすごく仏教が盛んになりつつあります。例えば、今回行ったのは福建省だったのですが、福建省の廈門（アモイ）のミナミホダジというお寺には、三百人から四百人の坊さんがいて、お寺の職員や坊さんも含めて千人で働いているお寺だそうです。そのときは金曜日でしたけど、浅草の浅草寺みたいな感じで、多くの人が境内を人が参拝で行き来していました。

それはそれとして、そこでもろんな若い人たちの話を聞いたのですけれども、中国はご存じのとおり一人っ子政策ですから、一人っ子が坊さんになっちゃったら、後が絶えてしまうんです。それから、一人っ子が坊さんになったらもちろん両親の面倒見てくれる子がいなくなるというような現実があります。その中で、彼らは出家しています。

「親たちとか親戚とかにどう思われているんですか」ということを聞きましたら、「自分の子供が坊さんになって、自分たちの行く末を拜んでもらえるということは大変うれしいことなので、『ぜひやりなさい』と言って送り出してくれました」という、十、八、九の小坊主たちが言っているんですね。だから、そのお寺だけでも三百人からの若い坊さんが修行していました。

その三百人だ、五百人だっていう坊さんが修行しているお寺は特殊じゃなくて、当たり前です。どこのお寺へ行っても、大体百人や二百人の若い坊さんを抱えている。そこで教育しながら坊さんの養成をしている。

そのエネルギー、もつと言えば、イッチャクモ中国のエネルギーを申し上げればきりがありませんけれども、今、現実の中国のそのエネルギーは侮れないものがある。いろんな、摩擦や、色々な問題がありますけどね、でも、仏教に関して言えば、どんどん出家者が増えている。一人っ子にもかかわらず出家者がいるという事実は、我々が注意して

いく必要があるだろうと思います。

「じゃあ、日蓮宗はいつたいどうなの？」と言われると、あまり……。そこはもう一つ申し上げたかったですけど、時間がありませんから、そちらの紹介だけにさせていただきます。

高佐 ありがとうございます。遠藤上人、お願い致します。

遠藤 特に難しい問題はないのですけれども、私は、久しぶりに会議に参加させていただいたんですけれども、非常に難しいテーマを抱えていて、執行部の所長さん・主任さんをはじめ、皆さん方が参加者に対する配慮というか、そういうことが、宣言文も含めて、非常に配慮、神経を使い過ぎておられるように私は感じましたので、ぜひ自信を持ってこの活動を進めていただきたいなと思いました。

参加者のどなたかが、「日蓮宗のお坊さんとして活動する」というのと、「活動している人がいる。ああ、あの人は日蓮宗のお坊さんだ」という見方があるような発言をちょっとされたことがありました。私も、行動している人が日蓮宗のお坊さんであれば良いのではないかなというふうに思いました。簡単ですけども、以上です。

高佐 はい、ありがとうございます。赤堀上人、お願い致します。

赤堀 この、ちょうどお施餓鬼が終わった次の日ぐらい、信徒の方から連絡ありまして、北海道の帯広郊外にご主人の実家があり、友達がラーメン屋をやっているので、行ったところ、そのラーメン屋さんが閉まっていたのです。調べてみたら、人口も減少し、高齢化して、ラーメン屋が成り立たない。でも生活保護は受けたくない。それで、山の

中に入って焼身自殺をしていた。この八月の七日に死亡したと。DNAの鑑定の結果本人だと分かったそうです。

それから最近、千葉の印西の方で針の混入事件というのが続きました。そのあとには山口御岳の限界集落で、五人殺し。これは津山の三十人殺しと関係・関連付けて言われていますけれど。

これらは、人間が生きていくこと自体が難しい状況になっていることを示しています。しかも、働き盛りの三十代の中で、うつ病が急増化してきている。

こういう中で、果たして仏教は何を発信できるかということが大きな課題になっていると考えます。

天道荒太さんが『孤独の叫び』という小説を書いています。この中に、孤独であることの幸せ、孤独を楽しむことの喜び、こういうものを主張しています。最近では、何かというと、絆とか、助け合いとかばかり強調されていますが、その助け合ったりお互いに気づき合ったりするその人自身が孤独にたえられないというところが、大きな問題ではないかと思っています。

そういう意味で、仏教の教理に基づいた人間観ではなくて、社会に迎合して、社会に相乗りして行っているというところが、日蓮宗全体、新聞だとかの論調に感じられてなりません。

社会の事象を、仏教の視点からとらえた見解を一般に呈示していく。そして、それを宗門の施政方針、あるいは伝道方針の策定に生かしていくという形を、現宗研はとるべきである。総長諮問機関としての役割が、現宗研の大きな意味としてあるんです。現宗研は宗門のシンクタンクであるべきだというのが私の考え方です。ぜも、そういう点も考慮して、今後の現宗研を活性化していただきたいと思います。

高佐 ありがとうございます。では、石川上人。

石川 平成六年に、石川教張先生が現宗研設立三十周年の座談会をされまして、そのときには、中村潤一顧問さんが司会をされておられました。それで、その当時の顧問の先生方が、みんなそのときの座談会のメンバーだったんです。私もたまたまそこに顧問の一人としていたものですから、この時のことが宗報にも載っております。

石川教張先生から私がバトンタッチを受けて感じたことは、石川教張先生の遺言とでもいいましょうか、「現宗研は、とにかく教化研究會議と教化センターの設立推進というものを立ち上げて、そうして、いわゆる檀信徒教化のためにどうあるべきか。日蓮聖人の教えである立正安国の精神に基づいた国づくり、そしてお題目の布教、こういうようなことに、とにかく邁進してもらいたいんだ」というようなことを、その座談会の中でも仰っておられた。私はそれを受けて、所長としての役割はこれだなということ、当時色々なことが起こっておりましてけれども、やはり、カルト教団の問題もそうですし、あるいは、カルトなのかどうか分かりませんが、富士大石寺顕正会というのもの、今は盛んに活動しておりますけれども、そういったところ、あるいは創価学会の動向など、いわゆる新宗教、あるいは新々宗教と言われるものに対する研究。それからやはり、何と申しまして、この教化研究會議が、しっかりと将来に目を向けながら発展していくことが大事だということで、そのことに集中してきたような気がいたします。従いまして、やはり常にこの教化研究會議というのは、本当に現代社会を的にして、即応した布教活動というものをどうすればいいかを研修・研究するところだと思います。

実は浄土宗も、ちょうど私が所長をしておりましてころに、「浄土宗でもこういった研究所を作りたいので参考にさせてもらいたい」と、わざわざ日蓮宗のこの現代宗教研究所に尋ねてこられたことがあります。そんなことを考えますと、日蓮宗は戦後いち早く、そうした現代に目を向けた宗団として活動し始めたんだと思います。これから先も、そういう気持ちを決して忘れてはならない。そのとき司会をされておられた中村潤一さんも、そのことについて結論としてお話をされている部分もあります。そういうことを考えますと、教研會議は非常に重要な会議だと思うわけ

です。

例のヒルトンホテルで、この研修、教研会議は開催されましたが、その最後に近い頃に、三十周年の祝賀会をヒルトンホテルで行っているんです。そのときには、もうすでに亡くなられた中濃教篤先生、あるいは長谷川正徳先生も、みんなそのときにはいらっちゃって、石川教張先生もいらっちゃいました。

それからもう約二十年経っているんですね。ちょうど二十年経とうとしているわけですが、二十年経って感慨深いものがあるわけですが、やはりこの教研会議が日蓮宗にはなくてはならない生命線であるという意識を常に持って、前向きに進んでもらいたいと思うわけでございます。以上です。

高佐 ありがとうございます。では、影山上人。

影山 先ほど、伝統仏教ばかりではなく新興宗教も布教ができないという話をしました。これは創価学会を例に取っただけですが、立正佼成会も半減したときの状況を見すえたPJを作って、自分たちの組織がギリ貧になったときどうするかということをやっているんです。これは現実には、今、宗教がお金にならなくなったということです。

実は宗教活動も経済がバックアップして動くのであって、日本は、昭和二十（一九四五）年に終戦を迎えたときに、人口七千万だった。これが五十年ほど掛けて、五千万増えて一億二千七百万ぐらいになっているわけです。その人口が増えたということで、現状の布教活動が進んできたわけです。

ところが、今ここで少子高齢化、つまり働き手が減ってお金が回らなくなった社会がきた。国の借金が今、一千兆円超えですが、それを抱えている意味は何かと言うと、貧しくなったら布教ができなくなったということです。

先ほど、不健康な人が増えていると言いましたが、生活習慣病、予備軍を入れると五千万人という数字が出ている。

これはみんな、こういう経済的なストレスが原因だというぐらい、やはり宗教に何が問われているかという社会の状況になっているのです。

私は主任になったときによく言ったのは、この宗務院の中で一番貧しいのは住職だということ。私は三十二才になったときに、三十一等級の寺の住職でしたので、檀家がいらないみたいなものでしたから、それで何とか食いつなぐには、人を巻き込まなきゃいけないということでやってきました。

ですから、今まさに、そういう本来の宗教活動を前提にしない限り、もう葬儀・法要対応型で寺院運営をすれば、戦後、五千万増えたところで頭打ちになったわけですから、社会の方に目を向けておかないと布教ができなくなる。これが教化学という考え方の一つの切り口だと思っんです。

主任になっていた頃に、各宗派の研究会にも顔を出しましたけれども、「日蓮宗さんは中央教研を持っているのがすごい。これだけ坊さんが集まって、現場の声が上がって、いろいろ話をしているのはすごい。」と。ですから、集まる方々が、現場で苦しんでいる方が、社会の問題を背負って、教研会議で発表し、意見を交換してほしいのです。その後に、そういう考えを充実させるために、石川所長さんにお願いをして、教化学研究発表大会というのを作ったのです。それは自由に発言できる研究会を始めたのです。それは、こういう今の社会状況を見すえて始めたつもりでありますので、ぜひ皆さんの現場の声としての教化学という切り口で語っていただきたいと、そんなふうに思います。

高佐 ありがとうございます。

残り時間が大変少なくなっておりますが、三原所長に、総括的な、かつ明日への決意表明をしていただければと存じます。

三原 何といえますか、影山さんから「現場」という言葉がたくさん出てまいりましたが、私も三・一が起ったあと、とにかく現場へ行ってみたいということで、随分この二年間、総務部からクレームが付くぐらい出張をさせていただきました。そして、行けば必ず、すごいものに出会うというのは確かでございます。学ぶことができる。尊敬する人に会える。

特にこの六月に水俣へ行きましたときに、水俣病語り部の会の緒方正実さん、この方が一つも自分の病気の不平不満を、チツソとか行政にぶつけることなく、「私たちは一人の人間としての生き方を忘れてしまってるんじゃないか、それを私は今、追及している」と語られ、この言葉には大変感銘を受けました。

我々教師というものは、教えるといえますけれども、実は様々な現場へ行って、素晴らしい人に出会うということがもっと大切なのではないかと思います。私は、皆さん方とともにこれからもそういう経験をしていきたいと、そういうふうに考えております。

高佐 予定の時間になりました。

十分なお話をしていただけなかったかもしれませんが、この顔ぶれの方に、一堂に会していただいております。ただただただということだけでも、大変意義のある時間になったのではないかと、信じるところでございます。

大変お忙しい中、お集まりをいただきました諸先生に、どうぞ拍手をお願い致します。どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。

現宗研関係略年表

年	日蓮宗 現宗研	一般	所長	主任
昭和37年(1962)	管長推戴・宗務総長宗会選出制 布教教学研究所設置決定	公明政治連盟（前年結成）、参議院で初当選 キューバ危機		
昭和38年(1963)	日蓮聖人門下連合会結成 日蓮宗宗徒総躍起東京大会 布教教学研究所設立準備委員会	三井三池炭鉱爆発事故 松川事件無罪判決 国鉄鶴見事故 吉展ちゃん誘拐事件 草加次郎事件 ケネディ大統領暗殺		
昭和39年(1964)	現代宗教研究所設立 初代所長久保田正文	東京オリゾンピック開催 東海道新幹線開通 公明党結党 キンク牧師、ノール平和賞 トンキン湾事件	久保田正文	研・近江幸正 調・望月一靖 庶・小山海信 主宰・ 木村勝行
昭和40年(1965)	宗務院を池上の現在地に移転	日韓基本条約成立 朝永博士ノーベル賞 国連安保理の非常任理事国入り アメリカがベトナム戦争に直接介入、北爆開始		
昭和41年(1966)		黒い霧解散 全共闘 新三種の神器		
昭和42年(1967)	「所報」創刊	小笠原諸島返還決定 非核三原則 公明党が衆議院に進出 動力炉・核燃料開発事業団発足	茂田井教亨	研・渡邊宝陽 調・丸山照雄 庶・木村勝行
昭和43年(1968)	第1回教化研究会議開催	日本初の心臓移植手術（？） 3億円事件 東大紛争 金婚老事件 ブラハの春 テト攻勢 北爆停止 キンク牧師暗殺		
昭和44年(1969)	「現代の伝道」 「寺院婦人の手帳」 靖国国家護持反対声明	日本のGNPが西側諸国で第2位 沖縄72年返還決定 アポロ月面着陸 創価学会言論出版妨害事件	宮崎英修	研・木村勝行 調・丸山照雄
昭和45年(1970)	第1回東北教研（教区教研の嚆矢）	大阪万博 70年安保 よど号ハイジャック事件 三島由紀夫事件	室住一妙	研・木村勝行 調・丸山照雄

年	日蓮宗 現宗研	一般	所長	主任
昭和46年(1971)	御降誕750年	トル・シヨック 円切り上げ 全日空石事故 イタイイタイ病判決 成田闘争激化 大久保清事件	中濃教篤	研・石川康明 調・内山堯邦 庶・蓮藤教温
昭和47年(1972)	「所報」を「現代宗教研究」に 改称 「月報」 創刊 「現代に生きる日蓮聖人」 公害問題アンケート	日中国交正常化 沖縄返還 あさま山荘事件 札幌オリソンピック 横井庄一さん発見		
昭和48年(1973)	中山妙宗合同後帰	石油ショック 金大中事件 長沼ナイキ基地訴訟判決 パレスチナ日航機ハイジャック		
昭和49年(1974)	第1回公開研究講座 加行所を中山法華経寺に一本化 靖国法案反対声明	小野田少尉発見 三菱重工ビル爆破 田中金脈事件 ハーグ事件		
昭和50年(1975)	『日蓮聖人の伝記と思想』	創価学会・共産党10年協定 ベトナム戦争終結		
昭和51年(1976)	「月報」を「研究時報」に改称	ロッキード事件 田中前首相逮捕 ミグ25亡命事件 五つ子誕生		研・石川康明 調・内山堯邦 庶・田澤元泰
昭和52年(1977)	『日蓮聖人名言集』	日本赤軍ハイジャック事件 有珠山爆発 青酸コーラ事件		研・石川康明 調・渡邊清明 庶・田澤元泰
昭和53年(1978)		成田空港開港 イギリスで試験管ベビー誕生		
昭和54年(1979)	映画「日蓮」(大映) 公開 日蓮劇公演(前座座)	東名高速日本坂トンネル事故、 ダグラスグラマン事件 スリーパー島原発事故		
昭和55年(1980)	宗務院機構改革 日蓮宗新聞社設立 立正平和シンポジウム	新宿駅バス放火事件 イエスの方舟事件 イラン・イラク戦争開戦	中野文海	

年	日蓮宗 現宗研	一般	所長	主任
昭和56年(1981)	700遠忌 『近代日蓮宗年表』	ロス疑惑		石川教張 久住謙是
昭和57年(1982)	宗務院第二庁舎建設	ホテルニュージャパン火災 フォークランド紛争	宮崎英修	
昭和58年(1983)		大韓航空機サハリン墜落事件 戸塚ヨットスクール事件		
昭和59年(1984)	第1回日蓮宗総合財団賞	グリコ森永事件		
昭和60年(1985)	勸学院設立 久遠寺大本堂落慶	日航ジャンボ墜落 豊田商事 投資ジャーナル エホバの証人輸血拒否死亡事件 ウイソドウス発売 ソ連共産党書記長にゴルバチョフ就任	長谷川正徳	赤堀正明
昭和61年(1986)	本願寺跡地、本願寺派に売却 『日蓮聖人・日蓮教団史 研究 雑誌論集目録』	男女雇用機会均等法 チェルノブイリ原発事故 チャレンジャー爆発		
昭和62年(1987)	日蓮聖人御遺文セミナー	朝日新聞社阪神支局襲撃事件 皇民党事件 ブラッックペンデー 大韓航空機爆破事件	石川教張	
昭和63年(1988)	修法問題(身延分置・蓮寿院)	リクルート事件 イラン・イラク戦争停戦 ベリストロイカ		
平成元年(1989)	大日蓮宗が復帰 『過疎地寺院調査報告 あなたは知っていますか?』 『現代社会の諸問題』	消費税導入 宮崎勤事件 セクシヤル・ハラスメント 天安門事件 ベルリンの壁崩壊		
平成2年(1990)		女子高生校門圧死事件 イラク、クウェートに侵攻		
平成3年(1991)	第二庁舎に移転 開教布教センターを北米に設置	雲仙普賢岳火砕流 イトボン事件 正宗が創価学会を破門 湾岸戦争 ソ連崩壊		

年	日連宗 現宗研	一般	所長	主任
平成4年(1992)	「教化リサーチ」	脳死臨調 「脳死は人の死」 PKO法案成立	石川浩徳	早坂鳳城
平成5年(1993)		細川内閣成立 55年体制崩壊		
平成6年(1994)	現宗研30年のあゆみ座談会 御学院 脳死臨床啓申	村山内閣成立 自社連立政権 松本サリン事件 価格破壊 就職氷河期		
平成7年(1995)	現宗研30周年記念式典	阪神大震災 オウム真理教地下鉄サリン事件 新語・流行語大賞のトップテンに「インターネット」		
平成8年(1996)	『日連宗の近現代』	乗客エイズ訴訟和解 資金量世界一の東京三菱銀行		
平成9年(1997)		臓器移植法成立 東海村放射能漏れ事故 酒鬼薔薇事件	影山教俊	
平成10年(1998)	「顕正会とはなにか」 「現代教学へのアプローチ」	和歌山毒入りカレー事件、長野冬季五輪 環境ホルモン 北朝鮮テポドン		
平成11年(1999)	清澄寺改宗50周年	ライフスベース事件、山口県光市母子殺害事件		
平成12年(2000)	第1回教化学研究発表大会			
平成13年(2001)		911同時多発テロ、狂牛病		
平成14年(2002)	立教開宗750年 宗務院新庁舎建設	雪印食品牛肉偽装事件、北朝鮮拉致被害者帰国 東電で原発のトラブル隠し	久住謙是	伊藤立教
平成15年(2003)	ハワイ開教100周年	イラク戦争		
平成16年(2004)	「日連宗女性教師アンケート報告」 「お題目総弘通運動」総括のための全教師アンケート調査報告書」	中越地震 イラクに自衛隊派遣		
			田澤元泰	

年	日蓮宗 現宗研	一般	所長	主任
平成17年(2005)		小泉劇場、郵政民営化、JR福知山線脱線事故、 マニシヨンの耐震強度偽装、自殺サイト連続殺人事件 日本人の人口、初の減少	三原正資	高佐宣長
平成18年(2006)	【創価学会批判 復刻版】	山中教授 iPS細胞作成に成功、いじめ自殺問題		
平成19年(2007)	立正安国・お題目結縁運動実動	消えた年金、中国餃子毒物混入事件、食品偽装問題 国民投票法成立、米サツプライム問題		
平成20年(2008)	久遠寺五重塔復原	秋葉原通り魔殺人事件、 リーマンショック、オバマ米大統領当選		
平成21年(2009)	『立正安国論』奏進750年 最上稲荷教が日蓮宗に所属	臓器移植法改正、裁判員制度、年越し派遣村 民主党政権		
平成22年(2010)		NHK特集「無縁社会」、尖閣で中国漁船が衝突 アラブの春（～2012）		
平成23年(2011)	『葬式仏教を考える』 『葬儀の心』	東日本大震災 福島第一原発事故		
平成24年(2012)		政権再交代、山中教授ノーベル賞、 東京スカイツリー開業 中央道笹子トンネル崩落事故		
平成25年(2013)				
平成26年(2014)	現宗研創立50周年			
平成30年(2018)	教研50周年			